

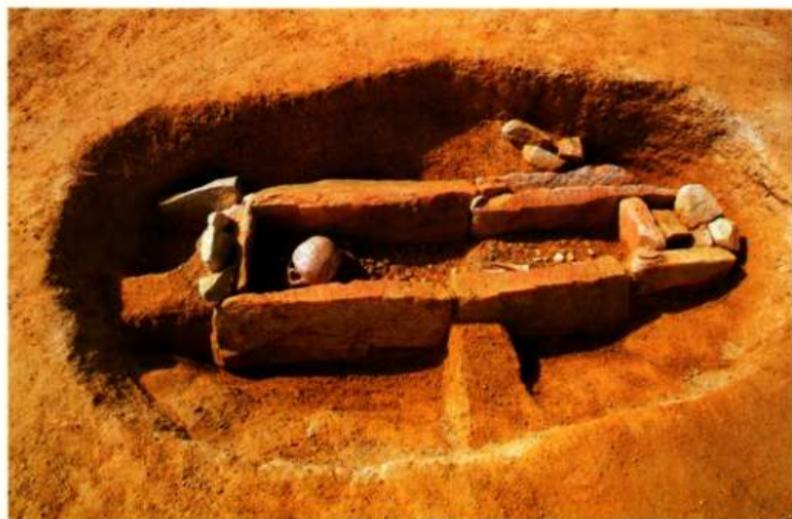
牛飼山古墳群

1993年3月

総社市教育委員会



牛飼山1・2号墳全景（西から）



牛飼山1号墳第1主体検出状況（北から）

序

古代吉備文化発祥の地として栄えた総社市には、数多くの埋蔵文化財の存在が知られています。これらは貴重な歴史的資料であり、これを保護保存して次の時代に伝えることは現代に生きる我々に与えられた責務であります。一つ一つの遺跡が古代吉備文化を解明する貴重なものであり、その保護保存には特に慎重に対処しているところであります。

こうしたことをふまえて本市では都市将来像を“古代と21世紀をむすぶ風格ある文化創造都市”とし、その推進をはかっているところであります。

しかしながら、社会情勢の変化とともに、地域開発の必要性が生じており、文化財保護との調和に苦慮していたしております。

本報告書の遺跡は、土地改良事業に伴う採土事業の計画地にあり、幾度となく協議を重ねた結果、やむを得ず発掘調査をして記録保存を図ることとなったものです。

調査の結果、5世紀と6世紀の小古墳ということが判明いたしました。本書が文化財の保護保存に活用され、あわせて郷土の歴史の解明に役立てば幸いです。

調査にあたっては、岡山県教育委員会をはじめ関係各位から多大な御指導と御協力をいただきました。さらに、地元の方々には発掘作業にお骨折りいただきました。あわせて厚くお礼申し上げます。

平成5年3月

総社市教育委員会
教育長 浅 沼 力

例 言

1. この報告書は、土地改良事業に伴い総社市教育委員会が実施した「牛飼山古墳群」の発掘調査の報告である。
2. 調査は武田恭彰が担当して平成3年9月17日から10月8日まで実施した。
3. 出土遺物の整理は、西平登代子の協力を得て社会教育課服部収蔵庫で行い、報告書作成後は同所に保管している。
4. 人骨については、濱田穰岡山理科大学教授より玉稿をいただいた。
5. 本報告書のうち玉類については文化係職員高橋進一が執筆し、他の執筆と編集は武田が行った。
6. この報告書の高度値は海拔高であり、方位は磁北である。
7. 第2図の地形図は、国土地理院発行の50,000分の1の地図を、他の地形図は総社市発行のものを複製したものである。
8. この報告書に関係する実測図、写真、遺物等は、服部収蔵庫で保管している。

目 次

序 文

例 言

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査にいたる経過	1
第2節 調査の体制	2
第2章 地理的歴史的環境	3
第3章 発掘調査の概要	5
第1節 位置と環境	5
第2節 牛飼山1号墳	6
第3節 牛飼山2号墳	11
第4節 まとめ	14
付 載 牛飼山1号墳出土の人骨	16

図 目 次

第1図 遺跡の位置	1
第2図 遺跡の位置 (S = 1/50,000)	2
第3図 周辺遺跡図 (S = 1/10,000)	4
第4図 調査前測量図 (S = 1/500)	5
第5図 1・2号墳墳丘平・断面図 (S = 1/200)	6
第6図 1号墳第1主体蓋石検出状態 (S = 1/20)	7
第7図 1号墳第1主体 (S = 1/20)	8
第8図 1号墳第1主体出土玉類 (S = 1/1)	9
第9図 1号墳第2主体 (S = 1/20)	10
第10図 1号墳第2主体出土ガラス玉 (S = 1/1)	11

第11図	2号墳主体 (S = 1/20)	12
第12図	2号墳出土遺物 (S = 1/4)	13
第13図	1号住居址平・断面図 (S = 1/80)	14

巻頭カラー目次

- 牛飼山1・2号墳全景(西から)
牛飼山1号墳第1主体検出状況(北から)

図版目次

図版1	1. 調査前の墳丘(東から) 2. 調査前の墳丘(2号墳)	17
図版2	1. 1号墳表土除去後(南から) 2. 1号墳第1主体	18
図版3	1. 1号墳第1主体蓋石除去後(北から)	19
	2. 1号墳第1主体蓋石除去後(東から)	19
図版4	1. 1号墳第1主体頭骨除去後(東から)	20
	2. 1号墳第1主体敷石除去後(西から)	20
図版5	1号墳第2主体(西から) 2. 1号墳墳丘遠景(東から)	21
図版6	1. 1号墳第2主体土層断面(北から) 2. 1号墳第2主体(西から)	22
図版7	1. 1号墳第2主体(西から) 2. 1号墳第2主体(東から)	23
図版8	1. 1号墳第2主体(北から) 2. 1号墳全景(南から)	24
図版9	1. 1号住居址(南西から) 2. 1・2号墳遠景(西から)	25
図版10	1・2号墳全景 2. 1・2号墳全景(南から)	26
図版11	1・2号墳全景(東から) 2. 1・2号墳全景(北から)	27
図版12	出土遺物	28

第1章 調査の経緯

第1節 調査にいたる経過

岡山県の南西部に位置する総社市は、吉備高原の南端にあり平野に接する低丘陵が無数に存在する。これらの丘陵には、古墳が数多く築造され、県下でも有数の古墳密集地帯として知られている。しかし、古墳の存在する丘陵の多くが花崗岩の風化土である良質の真砂土であるため、市内の各所で大小の土取りが行われ、埋蔵文化財の発掘調査もその対応を余儀なくされてきた。今回、調査した丘陵を含む総社市と真備町との境界一帯でも大小の土取り工事が虫喰い的にかなり以前より行われていた。

平成3年2月に総社市土地改良区より、市内下原地区の土地改良工事に伴う山土採取事業計画が出された。この計画予定地の丘陵を含む伊与部山の北裾部については、昭和56年度に民間企業工場の進出を前提とした分布調査が行われており、予定地の丘陵上には岡山県の遺跡地図では伊与部山16号墳とされている古墳が所在している。

このため、総社市土地改良区と文化財保護に関する覚書を締結し保存協議を行った。その結果、計画地の丘陵は平野部に突出しており、農作業の支障となっていたことや、構造改善事業

を進めるにあたり、良質な真砂土が近くで採取できる土地が他にないことなどから、予定地以外への変更が困難ということとなった。そのためやむを得ず発掘調査を行い、記録保存の措置をとることとなった。

発掘調査は工事計画が平成3年の冬以降であることや、水稲の取り入れ前の方が人員の確保上都合がよいことから平成3年の9月より行うこととした。



第1図 遺跡の位置図

第2節 調査の体制

発掘調査は総社市土地改良組合の経費の負担により、総社市教育委員会が岡山県教育委員会の指導助言のもとに実施することとなった。調査は平成3年9月17日から10月8日まで実施した。また発掘作業については地元住民の方々の協力を得た。記して厚く謝意を表します。

調査組織

社会教育課（文化係）

課長 平田定士

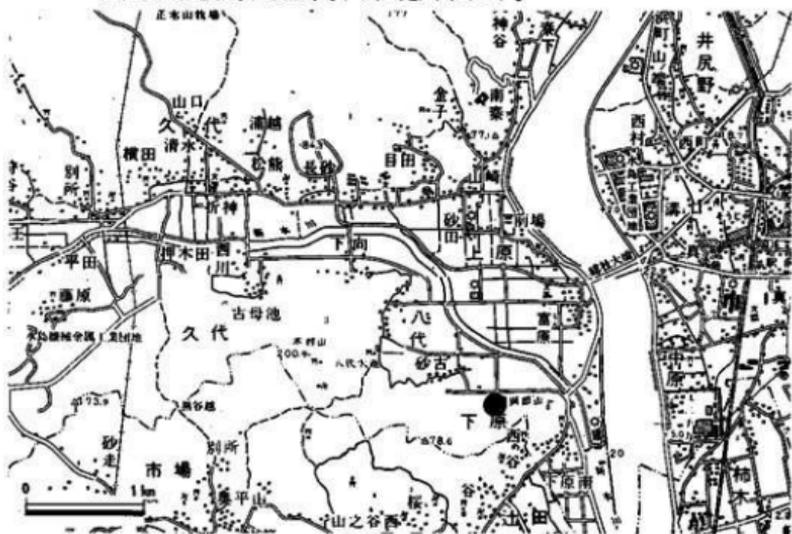
主幹 村上幸雄

係長 森田忠志

主事 荒木泰行

主事 武田恭彰（調査担当）

作業員 浅沼勇夫、浅沼糸松、浅沼新一、枝松安男、小西三郎、浅沼米夫、浅沼晴子、森谷嘉代枝、森谷弘子、浅沼孝子、川田元、川田つや子



第2図 遺跡の位置 (S=1/50,000)

第2章 地理的歴史的環境

県南西部に位置する総社市は、県下三大河川の一つ高梁川が吉備高原から南流して形成した平野上にある。この平野内には高梁川とその分流によって幾条もの河道が流れ、周辺に微高地を形成し、有史以前より先人の生活の場となり多くの遺跡が残されている。

牛飼山古墳群の所在する市内西域の高梁川右岸地域は、西から合流する新本川によって平野が形成されている。この細長い小平野の北には、標高300～500mのやや急峻な山並みが連なるが、南は真備町との境界となる標高200 m弱の緩く低い山々が東西続いている。

この平野では縄文時代の遺物も若干採集されているが本格的に生活の場となるのは弥生時代中期以降である。近年の圃場整備事業に伴う発掘調査では丘陵裾部の段丘上で弥生、古墳時代の集落址が、かなりの密度で確認されている。しかしながら、平野の中心を東流する新本川は、かなりの暴れ川であり低位部での安定した生産活動はかなり困難を極めたと思われる。

弥生時代には吉備の、特に備南地域を中心にみられる特殊器台を飾られた墳丘墓が丘陵上にみられるようになり、新本川流域では立板弥生墳丘墓、伊与部山墳丘墓が著名である。

古墳時代になると、平野の北側の丘陵上に古墳が築かれはじめる。三角縁神獣鏡を出土した秦上沼古墳、全長56mの秦大冢古墳、全長38mの茶臼山古墳などの前方後円墳は主として新本川下流域に集中している。またその周辺の丘陵上には多数の小規模な前期古墳が確認され、一部は発掘調査によってその内容が明らかになっている(註1)。

横穴式石室を有する後期古墳は、あまり大規模な石室の古墳は少なく、金子石塔塚古墳、久代大塚古墳、砂子22号墳などがあげられる程度である。しかしながら、水島機械金属工業団地の造成に伴う発掘調査で明らかになったように、小規模な石室の古墳がかなりの密度で丘陵の斜面に存在することは十分予想できる。また同時に明らかになった鉄生産遺跡によって、新本川流域は相当大規模な山林開発が古墳時代以降にあったことも確認されている。

そして、古墳時代終末期に県内唯一の横口式石棺を有する長砂2号墳や、飛鳥期創建で県内最古の寺院址でもある秦原鹿寺が存在することは、この新本川流域に吉備の中心地であった高梁川左岸流域には及ばぬまでも、かなり特色的で先進的な政治集団の存在が想定できよう。

註1 「長砂古墳群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告5』総社市教育委員会 1987年



第3図 周辺遺跡図 (S=1/10000)

第3章 発掘調査の概要

第1節 位置と環境

牛飼山古墳群は総社市下原に所在する。

新本川右岸の丘陵部は、高梁川との合流部を眼下に望む伊与部山を東端として緩やかに西に連なっている。古墳群はこの丘陵の裾部から北の平野に突出する低丘陵に位置している。

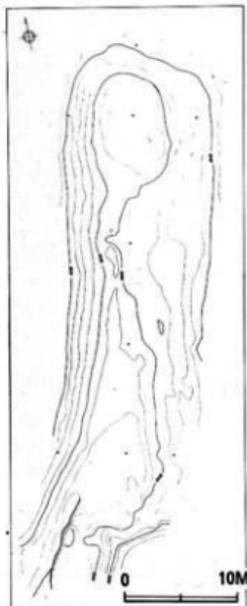
この新本川右岸地域は、左岸地域ほど大規模な古墳は確認されておらず、数も少ないと考えられるが周辺の丘陵頂部から鞍部には、弥生墳丘墓と前期古墳が比較的まとまって確認されている。また、調査墳に近接する丘陵上に存在する砂古22号墳は、一辺27mの方墳で横穴式石室を有することがわかっている。他にも裾部斜面には小規模な後期古墳が多数存在したことは十

分子想きるが、古くからの開墾などによって耕地はかなり上方まで伸びており、消滅したのことが多いことは、土地の古老の話からもうかがえる。

調査墳の位置する丘陵も耕作によってかなり削平され、さらに以前の土砂採取によって尾根本来の地形はかなり改変させられていた。しかし、先端部付近の頂部が削平されていないことは、立木伐採以前でもはっきり確認できたので古墳と認識することは容易であった。

また、調査前の墳丘測量によると後に1号墳とした高まりから南に若干、造り出し状に墳丘が伸びて、切断されている状況が看取できたが、この時点では2号墳についてはまったく確認できなかった。

そして、今回調査した住居址は1軒であるが、裾部の緩斜面には土器片が散乱しており、小規模な集落が存在することが十分予想できる。

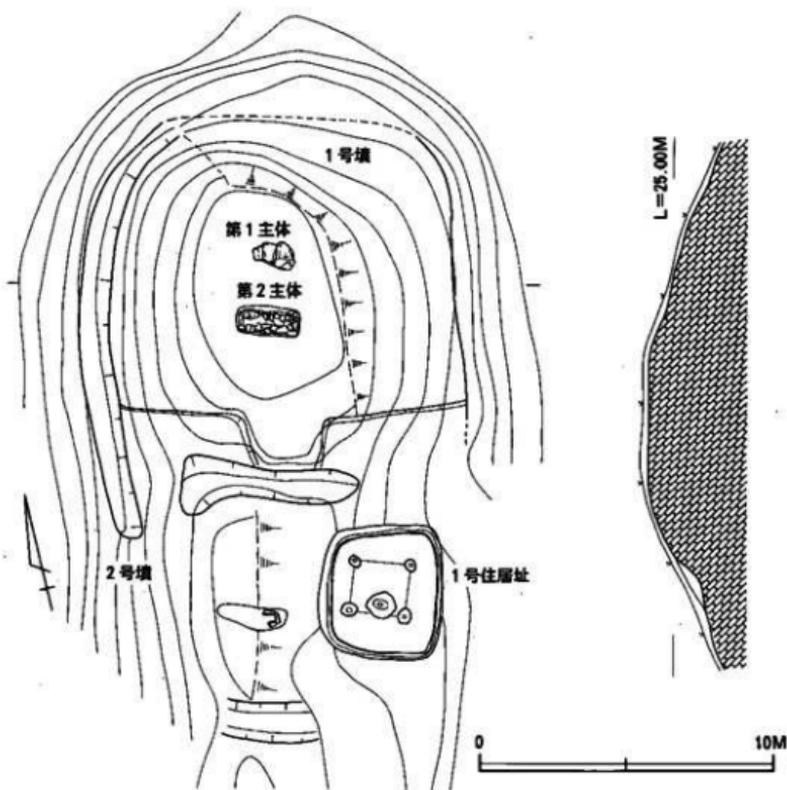


第4図 調査前測量図 (S=1/500)

第2節 牛飼山1号墳

1. 墳丘

本墳は、伊与部山から北に派生する舌状の標高26m弱の尾根に位置している。この尾根は馬背状のやせ尾根で、東西北斜面とも裾部はかなりの急斜面となっている。東と北の斜面頂上近くは果樹園の造成時に削平されたためやや傾斜が緩くなっている。



第5図 1・2号墳墳丘平・断面図 (S=1/200)

調査は墳丘上の表土除去に先立ち、ほぼ東西南北にトレンチを設定し掘り下げた。この結果約20cmの腐触土を除去するとすぐに地山である花崗岩土が表れた。そのため、墳丘盛土はほとんどが流出したものと考え、トレンチに沿って土層観察用の畦を残し、墳丘前面の表土を除去した。

その結果、墳丘頂部の平坦面で第1主体の蓋石を検出した。また西側の斜面で階段状に削平した段状部を検出したが、北側と東側では、耕作による攪乱が激しく、東側で若干の痕跡を確認したのみである。南斜面は設定したトレンチの断面から、後世の溝状の遺構に墳丘が切断されている状況が看取された。この溝は南に位置する2号墳の周溝であったことが後から判明した。また切断された墳丘の断面に人工的な土の積み上げが見られたため平面を精査した結果、幅約2.5mの方形の造り出しを確認した。

以上の状況から、本墳は墳丘盛土をすべて失い正確な高さは不明であるが、斜面を段状に整

形して構築し、方形の造り出しを加えられた1辺約10mの方墳であると考えられる。

なお墳丘上から若干の土師器の小片が出土した以外は、墳丘では遺物はまったく確認できなかった。

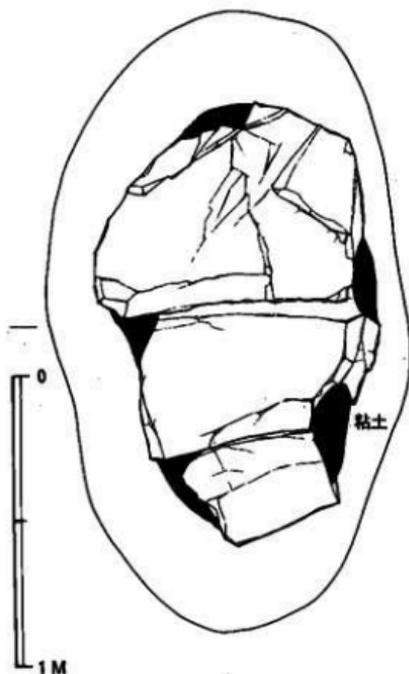
2. 埋葬主体

本墳には、2つの埋葬主体が検出された。墳丘北側に位置する第1主体は箱式石棺である。尾根主軸に直交して長さ約2.1m、幅約1.2mの楕円形の墓土壌が穿たれている。

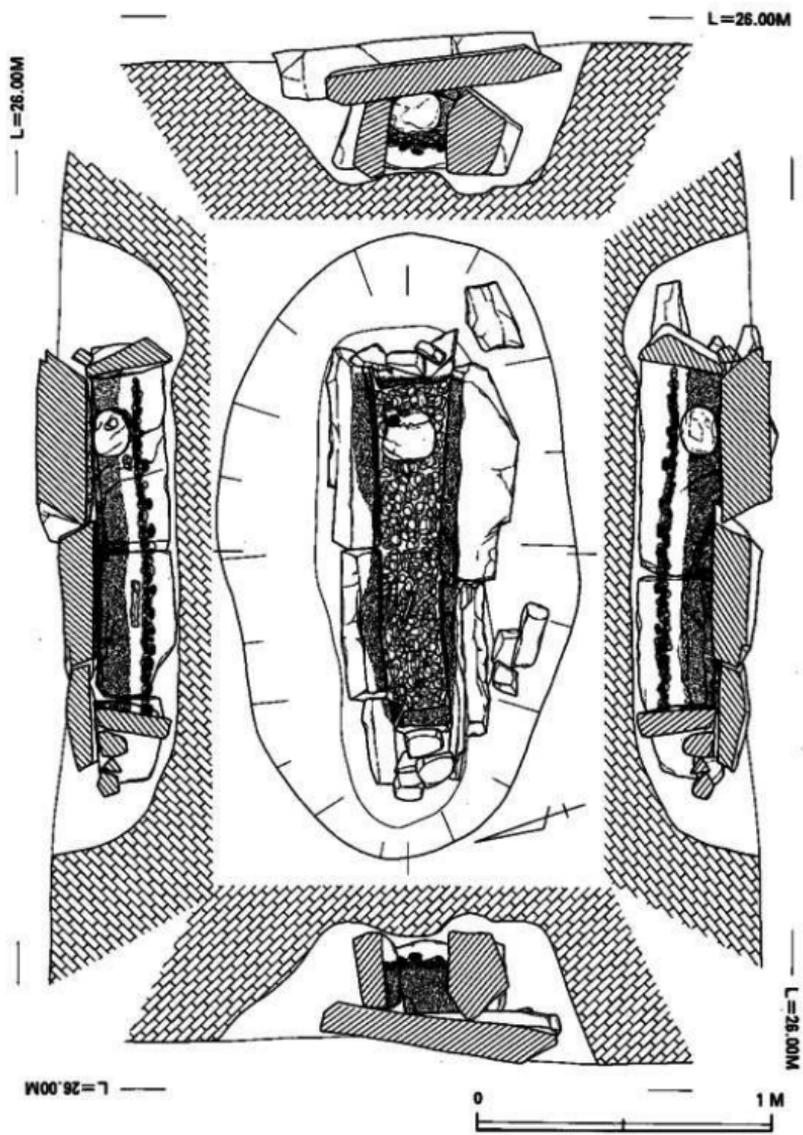
蓋石は3枚が認められ、棺の平面形に合致するかのようには東から西へ徐々に小さくなる。石の隙間は明黄色の粘土が充填されている。

箱式棺は、頭部に近い石は比較的大型のものが用いられ、小口は小型の石材を用い、いずれも平滑な面が内側になるように配している。

棺内には、頭蓋骨と他の骨が若干残存していた。頭骨は歯の部分を受損するものの、比較的良好に残っていた。床面には玉砂利が敷か



第6図 1号墳第1主体蓋石検出状況
(S=1/20)



第7图 1号墳第1主体 (S=1/20)

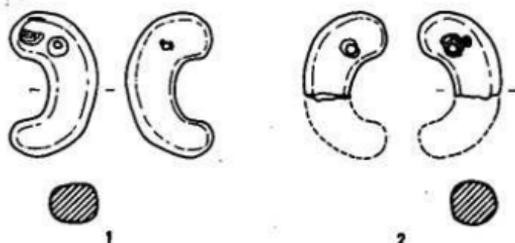
れ、その上に頭骨が乗った状態であった。玉砂利の下には目の細い黄褐色土が敷かれている。

また、蓋石と、側石内面には赤色顔料が入念に塗布されていたが、玉砂利にはまったく着色は確認できなかった。

箱式石棺の内法は全長110cm、幅30~20cmで、出土した骨が小児のものであることを考えても遺体をそのまま納めるにはやや無理がある。頭骨の向きなどから考えて再埋葬と考えたい。

また、頭骨の下から、勾玉と管玉がかたままって出土した他は副葬品は確認できなかった。

石材を除去した後の墓壇からは、石材に合わせて若干溝状に底部を掘り窪めている状況が明らかになった。



出土遺物

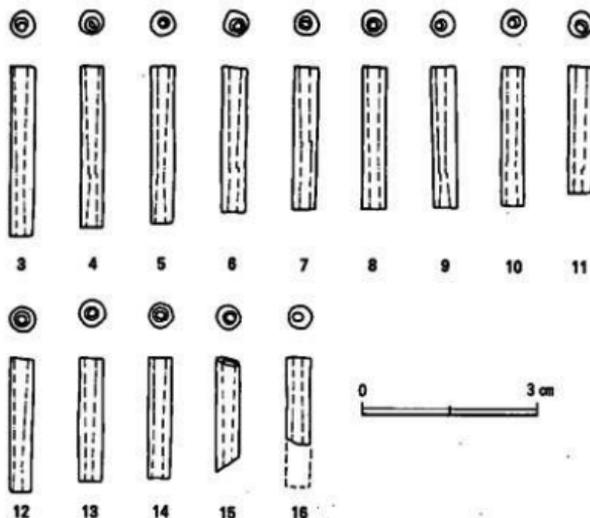
1. 第1主体出土遺物

勾玉 (第8図1・2)

いずれも赤褐色を呈する良質の瑪瑙製。やや小ぶりであるが、ていねいに研磨されており、紐孔は片面穿孔。2の孔末には大きな断口が残し、その脇には穿孔痕が残っている。

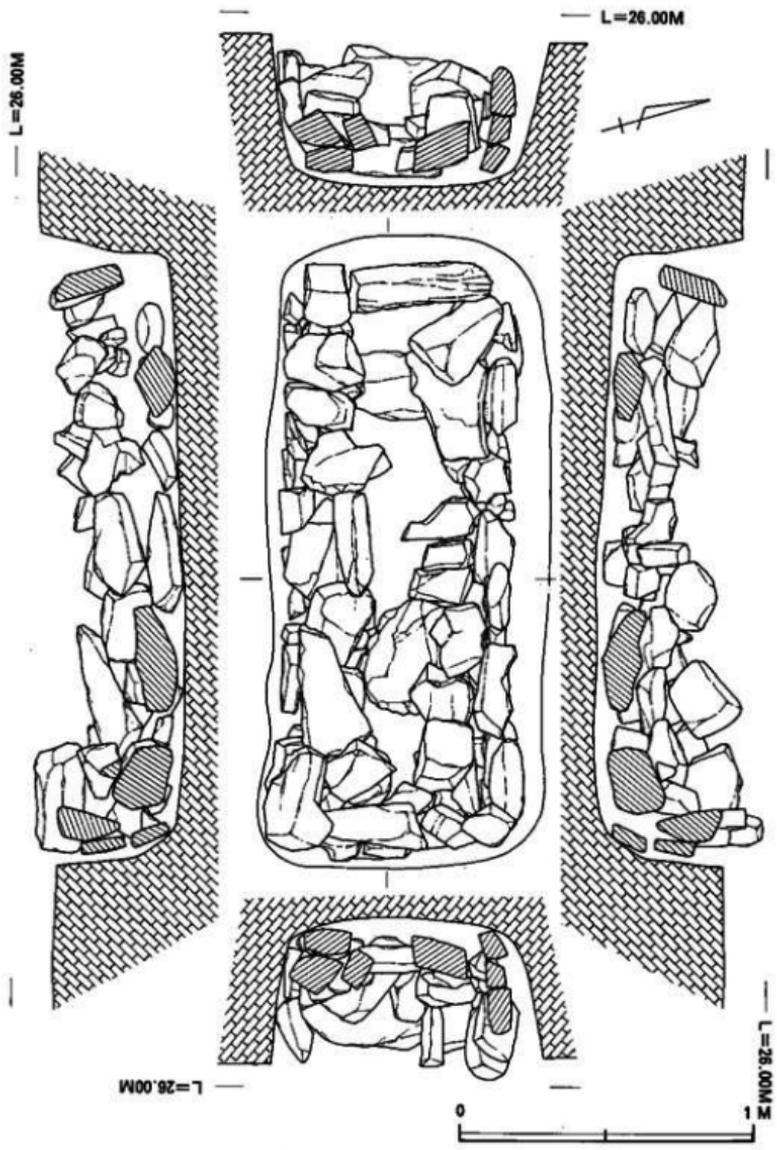
管玉 (第8図3~16)

やや青みがかった淡緑色を呈する比較的硬質の緑色凝灰岩製。全て両面穿孔。両孔は、7がほぼ中央で寄せ合う他は、およそ3:1~4:1の割合である。形態・材質から5世紀代のものと考えられる(註2)。



第8図 第1主体出土玉類 (S=1/1)

註2 高橋通一「副葬品について」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』9



第9图 1号墳第2主体 (S=1/20)

次に第2主体は、第1主体の南約1.5mにやはり主軸と直交して検出された。

石材は検出面ではほとんど確認できなかったが、墓墳の輪郭を検出した高さで、30cm四方あまりの玉砂利のかたまりを確認した。そして、これを精査するとガラス小玉が混じっている状態が明らかになった。

墓墳は長さ2.2m、幅1mの長方形で、ほぼ垂直に穿たれ、内法いっぱいまで石材が立てかけられている。石材は、形は不揃いであるが扁平なものが用いられている。小口にはうすく板状のものが立てられており、小竅穴石室と呼ぶべき石材の用い方である。

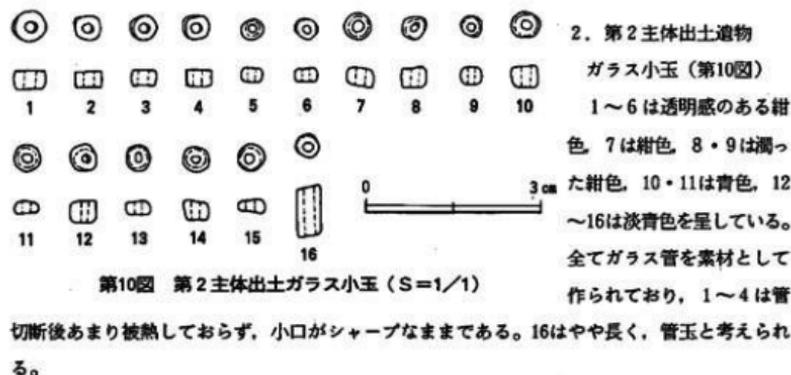
底部には比較的大型の石2個が棺台として据えられている。土層の観察から見て、この棺台上に木製の棺があり、腐食のため落ち込んだのち側方の石材が傾いたり倒れたものと考えられる。

また最初に検出した玉を含む玉砂利は、石室の埋土の上層に堆積しており、棺を埋葬した後に砂利石を敷き玉をまいたと想定できる。

他に石室内にはまったく遺物はなく、骨なども確認できなかった。

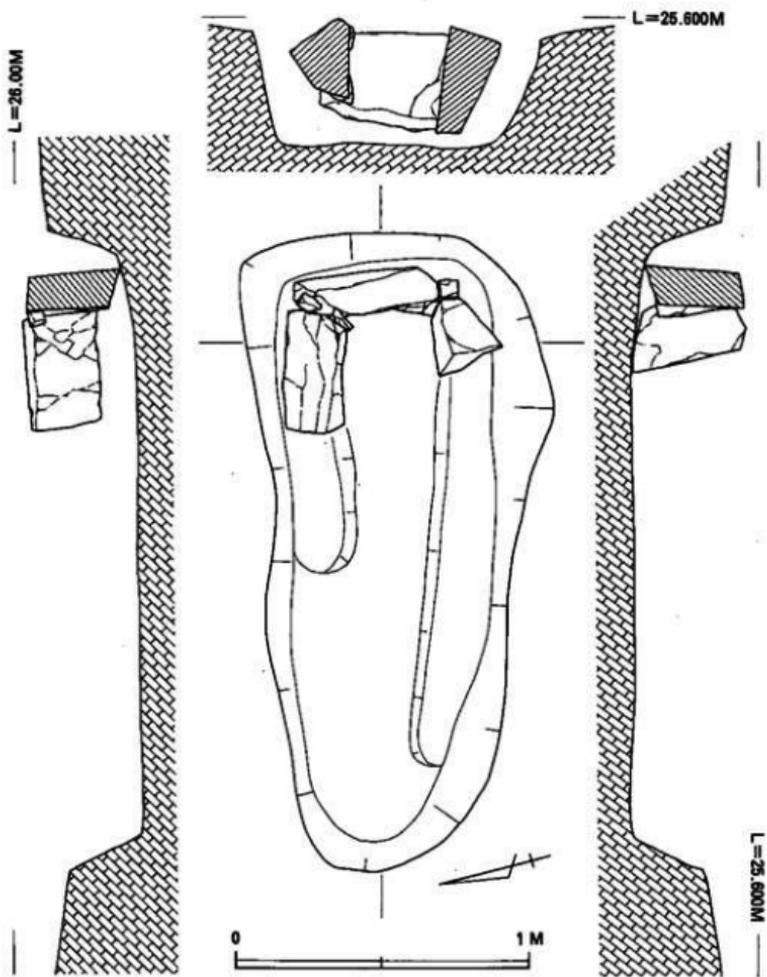
また、内法は最大で全長約170cm、最大幅約70cmであり、大人の埋葬が十分可能である。

石材を取り上げた後の墓墳には第1主体のように掘り窪めた跡もなく平坦であった。



第3節 牛飼山2号墳

2号墳は1号墳の南に伸びる馬背状の尾根に位置している。調査前の測量時には、特別に墳丘らしい高まりは確認できなかったが、立木の伐採後に、箱式棺の石材らしいものが散乱していることが明らかになったため注意して表土除去を行った。



第11图 2号坟主体 (S=1/20)

その結果、腐触土を除去した段階で墓壊らしい窪みと攪乱を受けずにかろうじて残った箱式棺の石材を確認し、古墳であることが判明した。

2号墳の墳丘は、盛土部はまったく流出し、表土直下で地山土である。しかしながら、1号墳との間と、主体の両側に尾根を切断するよう穿たれた周溝が検出された。この周溝は、深さ約20～30cmで、1号墳の造り出しを切断していることが確認された。ただ東辺と西辺の形状はまったく不明であり、やや直線的な様相ではあるが、円墳か方墳かの判断はしかねる。

主体部は1か所で、墳丘中央に尾根と直交して位置している。

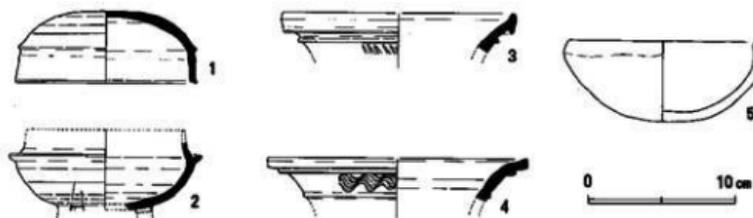
石材は東側の小口と左右1枚づつが残り、箱式石棺であったことが推定できる。棺は幅30cmで長さは不明である。石材は周辺に散乱していたものも同様の大きさであった。

墓壊は、長さ220cm、最大幅約1mの不整形な楕円形で、底面は側方のみ溝状に掘り窪められていた。

遺物は棺内からはまったく出土していないが、古墳東側斜面で、須恵器、土師器が散乱した状態で出土した。本来は主体部近くに副葬されていたと思われる。

1は須恵器杯蓋で完形品である。口径12.5cm、器高4.9cmで稜線や端部はシャープに仕上げられている。2は須恵器有蓋高杯である。脚部は欠損しているが残存する透しからみて3方向に細長い透しが穿たれていたと考えられる。1と2はいずれも堅緻な焼成で青灰色を呈する。

3と4は須恵器の甕である。いずれも体部の破片が出土しているが実測は不可能であった。3は垂れ下がる口縁端部とシャープな突帯を有し、ヘラ描きの斜線文が巡らされている。4は突帯の間にクシ描きの波状紋が巡らされている。いずれも焼成は堅緻で暗青灰色を呈している。5は土師器の杯である。指頭玉と丁寧なヨコナデで成形され、内面には赤色顔料が塗布されている。胎土は砂粒を含まず、焼成は良好である。他にも若干、土師器片が出土しているが、図示し得なかった。

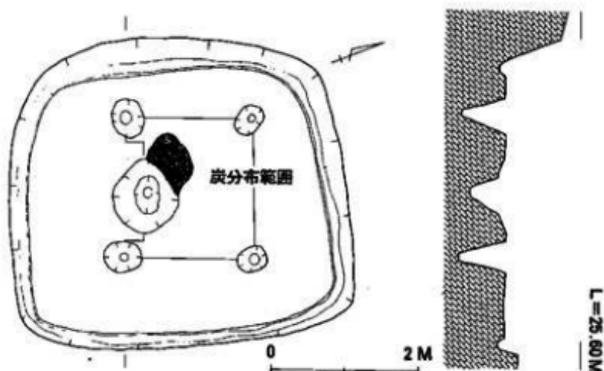


第12図 2号墳出土遺物 (S=1/4)

1号住居址

1号住居址は、2号墳の東側斜面に位置している。2号墳が築造された時には墳丘下に位置したと考えられるが、盛土がすべて流出していたため、表土を除去した時点で住居址の輪郭はほぼ検出された。規模は1辺約4mの隅丸方形の住居址である。覆土は黒褐色土で遺物等はまったく確認できなかった。床面には四本の柱穴と、中央穴が検出された。柱穴は深さ60~70cmで、中央穴の覆土と周辺には炭が広がっていた。床面はさほど堅くはなく貼り床等も見られなかった。尾根の頂部側の西壁は約80cmが残存し、幅20cmの壁体溝が巡っている。

時期としては、住居址の形態より古墳時代初頭が考えられる。



第13図 1号住居址平面図(S=1/80)

第4節 まとめ

今回の調査により牛飼山1、2号墳と1軒の住居址の内容が明らかになった。

牛飼山1号墳は尾根の先端頂部に位置する10m四方の方墳であることが判明したが、本墳のように平坦な段を三方向に巡らせることによって墳丘を区画する例は現在のところ市内の他の古墳では例を見ない。また尾根のくびれ部に造り出しを付設することも同様である。

1号墳の時期は陶器編年TK43型式の須恵器が副葬された2号墳の周溝が造り出しを切断することから少なくとも6世紀初頭以前であり、目立った副葬品はないものの玉類から考えて5世紀前半とすることが妥当と思われる。

市内の同時期の古墳で内容が明らかになったものとしては、殿山古墳群が挙げられる。しかしながら、箱式棺と小壜穴石室を同一墳丘上に有する例はない。また、墳丘の築造と形態もやや異なっている。特に内面に赤色塗彩を施し玉砂利を敷く主体や、造り出しをもつことは他の古墳よりやや優位の内容としても過言ではなかろう。

また、墳丘の整形は多分に立地的な要因によるものであろうが、方形に巡る段により、平野部からみる墳丘は際立っており、視覚的には非常に効果的と言えよう。

この古墳群を造営した集団としては、現在の神在の集落あたりに微高地が想定されることから、新本川と高梁川の合流域付近を中心とする集落が考えられるが、たび重なる水流の変更に より正確な微高地の形状は不明で、遺跡の広がりや性格についても不明である。

付載 総社市下原牛飼山1号墳出土人骨について

濱田 稜（岡山理科大学）

平成3年度の調査で総社市下原牛飼山1号墳より5世紀以降のものと思われる遺物が発見され、そのなかに人骨が含まれていた。本人骨は頭左側面を下にして、仰向け伸展位で葬られており、保存状態は頭部と体肢部の一部を残すのみでありあまり良くなく、残存部も骨質がかなり脆弱である。後述するように乳歯の萌出状態や顎骨内での永久歯の形成状態より、本被葬者は4～5歳の幼児であったと思われる。

頭蓋骨：後頭部と頭蓋底部のほとんど、側頭部と顔面頭蓋上半分、さらに下顎骨全体が失われている。頭頂骨と前頭骨は左右ともほぼ残存しているが、保存中に冠状と矢状の縫合部で接合が外れた。側頭骨は左側のみが残っており、頬骨突起も基部が残存している。

顔面頭蓋では、上顎骨右半がほとんど残っているが、頬骨弓部はその基部近くのみ見られる。口蓋部も上顎口蓋突起より後方、第一大臼歯歯槽部までかなり良く保存されている。前頭骨と上顎骨により眼窩開口部形態はおおよそ復元できるが薄い眼窩壁は失われている。また鼻骨も前頭骨との縫合部より消失しており、梨状口は完全とはならない。

顔面部から頭頂部にかけて薄く赤色顔料が認められる。

上顎骨には第一、第二乳臼歯のみが植ったままで残っているが、歯槽の状態から、萌出状態は乳歯列が完成したところである。第二乳臼歯の後方歯槽部に形成途中で、遊離した第一大臼歯の穴が見られる。さらに後方には斜めに、第二大臼歯の歯槽縁に達する小さな穴も認められる。

切歯についても乳歯歯根の奥に永久歯の形成が認められる。形成途中の歯は多くが顎骨骨体より遊離しており、切歯は3本、第一大臼歯は4本、小臼歯は5本の合計12本が数えられる。これらの歯は全て未完成であり、歯冠部しか形成されていない。

体肢骨：いくつかの破片をのぞき、ほとんどが消失している。椎骨は第一頸椎の小片と第二頸椎の歯突起を含む右半のみが残存している。下肢右側では大腿骨が遠位骨端部を除く骨幹遠位部約2分の1を、脛骨は近位関節部を除く約2分の1がそれぞれ残っている。左側では大腿骨の小片のみで、これは遠位骨端部を除く骨幹遠位部約4分の1に相当する。これらの他には、肋骨の部分破片が1個、識別されたのみである。



1. 調査前の墳丘（東から）



2. 調査前の墳丘（2号墳）

図版 2



1. 1号墳表土除去後（南から）



2. 1号墳第1主体（南から）



1. 1号墳第1主体蓋石除去後（北から）

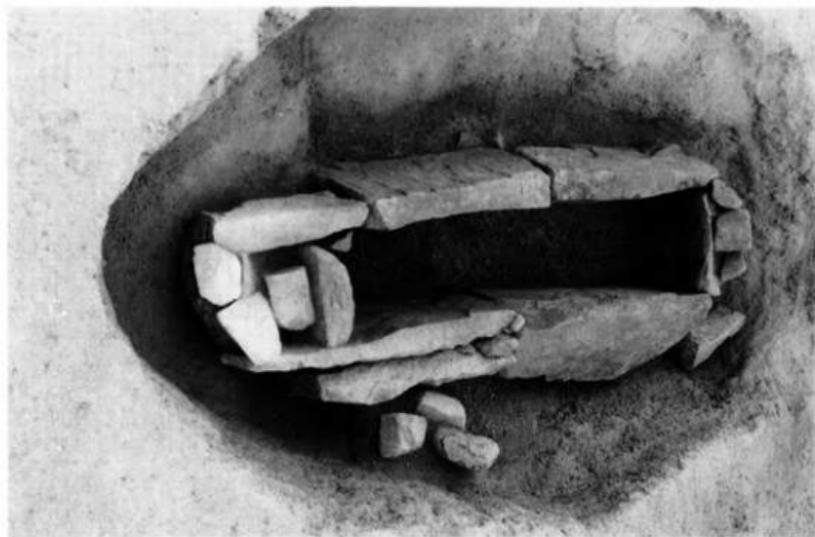


2. 1号墳第1主体蓋石除去後（東から）

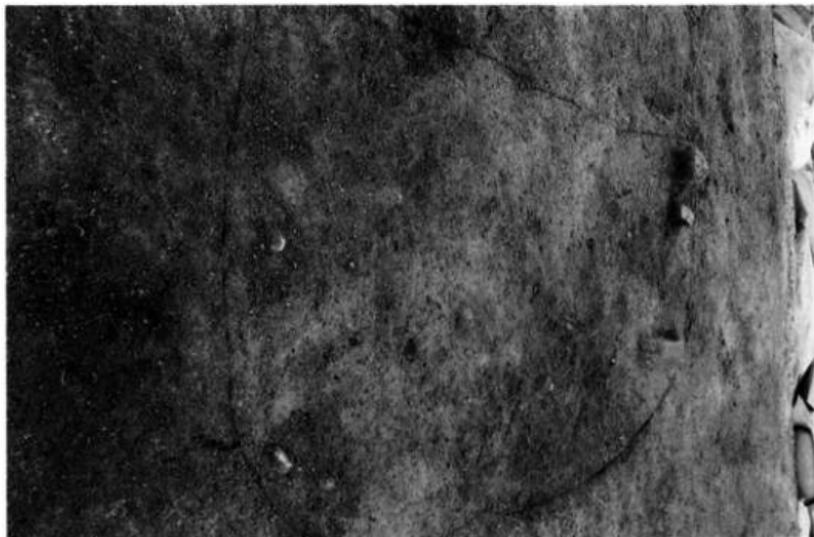
図版 4



1. 1号墳第1主体頭骨除去後（東から）



2. 1号墳第1主体敷石除去後（西から）



1. 1号墳第2主体（西から）



2. 1号墳墳丘遠景（東から）

図版 6



1. 1号墳第2主体土層断面（北から）



2. 1号墳第2主体（西から）



1. 1号墳第2主体（西から）



2. 1号墳第2主体（東から）

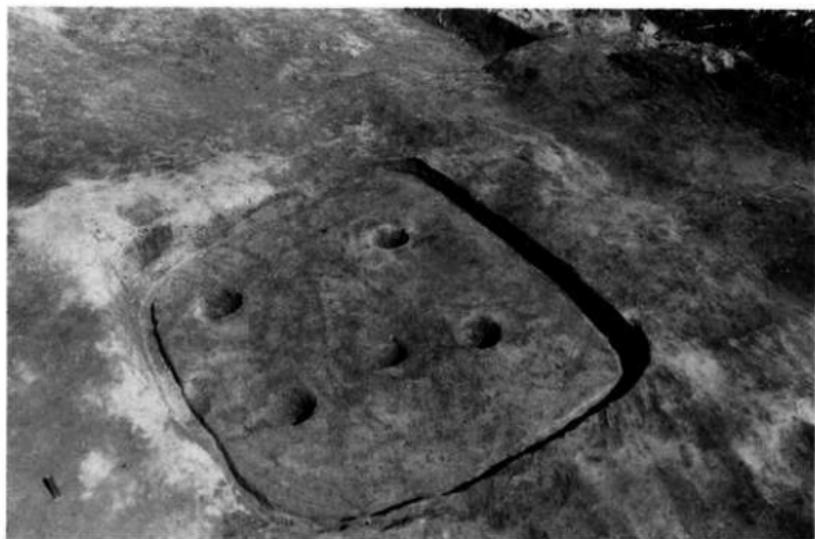
図版 8



1. 1号墳第2主体（北から）



2. 1号墳全景（南から）



1. 1号住居址（南西から）



— 2. 1・2号墳遠景（西から）



1. 1・2号墳全景



2. 1・2号墳全景（南から）

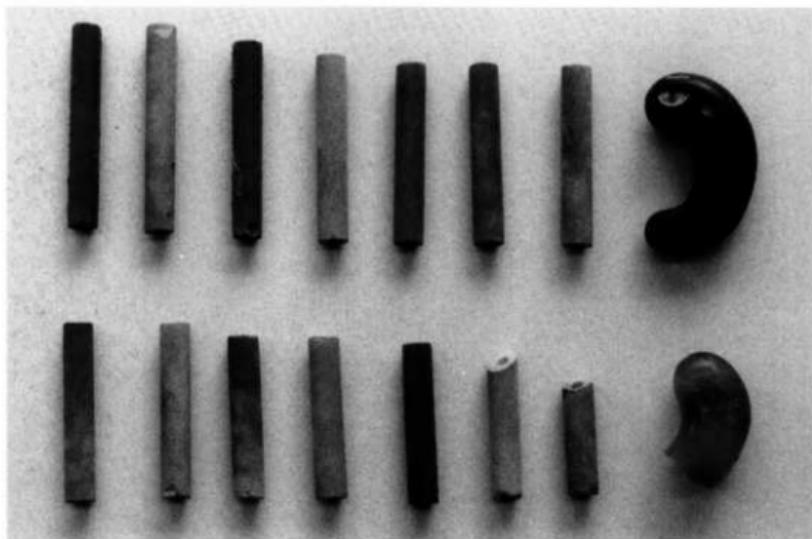


1. 1・2号墳全景（東から）

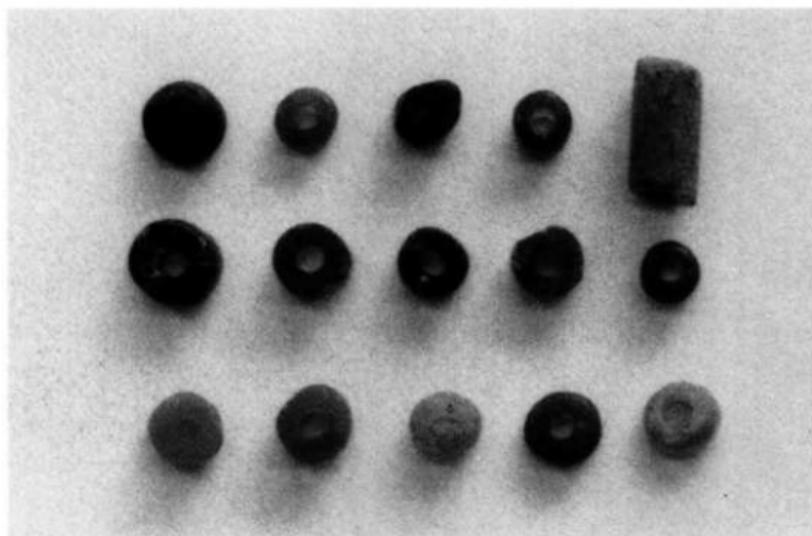


2. 1・2号墳全景（北から）

図版12



1. 1号墳第1主体出土玉類



2. 1号墳第2主体出土ガラス小玉

總社市埋藏文化財発掘調査報告12

牛飼山古墳群

1993年3月 印刷
1993年3月 発行

編集発行 總社市教育委員会
總社市中央一丁目1番1号

印刷 柳本印刷株式会社
總社市總社一丁目10番24号

